

大崎、夜明けの時に辿って。【都市再生編②】 蘇ったOSAKI。人とまちが豊かにつながる

過去から現在、未来へと受け継がれていく「ふるさと大崎」のDNA(原風景)を訪ねる『おさき今昔物語』。

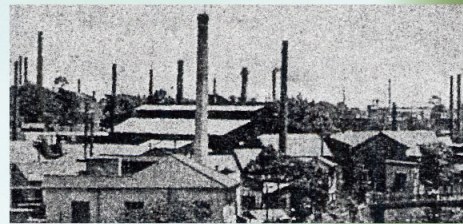
その、第三十六話は、市街地再開発によって輝きを取り戻した“テクノスクエア大崎”へ、新たに、人と、まちの繋がりを求めて始まった人々の歩み。

天空に輝くビルの麓を埋める、人の賑わいと息吹は、“OSAKIのこれから”を指し示しているかのようです。

目黒川を囲む再開発前の大崎



まちづくりへの歩み (昭和中期～)



- 昭和30年代 急激な経済成長で大崎は有数の工業地帯へ
- 昭和40年代 品川区への過度の人口・産業集中で公害が問題化
- 昭和51年 公害対策をにらんだ「品川区長期基本計画」策定、「住宅と産業の調和のとれた緑豊かな近代都市」へ取り組み開始
- 昭和57年 東京都長期基本計画策定(大崎副都心の指定)
- 昭和62年 東口第1地区(大崎ニューシティ)竣工、その後、大崎駅周辺地域の再開発が進む
- 同年 同地区にて「しながわ夢さん橋」イベント開始
- 平成19年 「大崎駅周辺地域都市再生ビジョン」策定(H16年)に伴い、まち運営組織として「大崎エリアマネジメント」誕生。以後「しながわ夢さん橋」をはじめとする多くの地域イベント支援を実施
- 平成20年以降 大崎駅周辺地域の街区整備と地域イベント等により、大崎の活性化が進む

昭和40年代、品川区への過度の人口、産業集中と、その後の工場移転等による、“大崎の低迷へ、曙の光を灯した市街地再開発事業。それは同時に、“ものづくり大崎”に加えられた“コトづくり大崎”への新たな第一歩となりました。



大崎ニューシティ竣工の年、ここから人とまちの新しいつながりが...

草創の歴史を経てもたらした「大崎の曙」から

昭和62年、大崎駅東口第1地区(大崎ニューシティ)の竣工を契機に開始された地域イベント「しながわ夢さん橋」。それは、地域に開かれた公開空地を介して始まった、大崎のまちと人のつながりの第一ステージとなりました。灰色のイメージが強かった大崎のまちが晴れて、先端技術のテクノスクエア(東京都長期計画)へと向かったこの時、人々の手による「ふるさと大崎」の真の都市再生、新たな魅力創造が、多くのコトづくりを通じて開始されていったのでした。

「しながわ夢さん橋」をはじめとする多くの地域イベントが開始された都市再生以降の大崎。「目黒川みんなのイルミネーション」や「お花いっぱい大崎」運動も、

今では大崎の誇る季節催事として浸透。若者に訴求するレアーなイベントも含めて、そこには大崎を盛り上げる新しい地域の力が結集しつつあります。

